

中学校における長距離走の実践的研究 —「競争の学習」によるイメージの形成—

小塚 雄介

Practical study of the long-distance race in the junior high school —The formation of the image by "the learning of the competition"—

Yusuke KOZUKA

1. 研究の問題と目的

平成20年に改訂された学習指導要領では、子どもたちの現状をふまえ、「生きる力」を育むという理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視している。その中の「確かな学力」とは、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図ることであり、学習内容の適切さが大切になってくるのではないだろうか。

小学校の持久走と中学校、高等学校の長距離走の学習指導要領の学習内容を見てみると、そこには大きな違いが見てとれる。持久走は「無理のない速さで」走ったりすることなどが例示されている¹⁾のに対し、長距離走は「一定の距離を走り通し、タイムを短縮したり競走したり」することをねらいとしている²⁾³⁾。しかし、かつて持久走の長距離走化の問題が指摘されたように、持久走と長距離走の学習内容の混同が起きていると考えられる。また、「健康づくりのために」、「将来必要になるから」などと教師から言われても実感が湧かず、子どもたちは「測定の意味や目的」、「タイムやペース」といったことをほとんど理解していないことから、子どもにとっての必要感と大人のそれとが異なっていることが挙げられる。さらに、タイムや着順による序列化により、苦手意識をもつ子どもにとっては、劣等感を増幅させる原因につながるのは容易に想像できる。そこで、そのような子どもたちを少しでも減らすために、序列化とは異なる教材づくりの工夫をする必要があると考える。今回は教材として、長距離走のタイムが速い生徒と遅い生徒が競走して、両者が競り合えるような「時差スタート」を用いた「競争」の授業を考案した。

そこで本研究では、長距離走とその関連領域である持久走の授業事例を集め、その各事例の授業の構成要素やねらいを抽出し、これを明らかにする。さらに、持久走と長距離走の学習内容の混同を問題として指摘する。これを研究Ⅰとする。また、研究Ⅱとして、筆者の考案する長距離走の授業を実践し、その実践を通して子どもたちの長距離走のイメージがどのように変容したのかを明らかにする。

<研究Ⅰ>持久走・長距離走の事例の調査

2. 研究方法

2-1. 持久走・長距離走の授業実践事例

国内の主要雑誌「体育科教育」「たのしい体育・スポーツ」をはじめ、授業事例を示した文献やインターネット上で公開されている学習指導案等を本研究の対象とする。この中には、小学校・中学校・高等学校の持久走・長距離走の授業実践例が含まれる。

2-2. 分析方法

分析対象の中から、「タイトル（テーマ）とねらい」、「方法」、「成果」を要旨として抽出する。さらに、その「方法」の持久走・長距離走の学習課題に着目して、「テキストマイニング法」⁴⁾を採用することにより、共通のキーワードで分類する。その抽出されたキーワードから、持久走と長距離走の学習内容にどのような混同がみられるかを検討する。

3. 結果と考察

収集した全40事例の「方法」は、「フォーム」、「心拍数・脈拍」、「呼吸法」、「ペース走」、「競争」、「課題別練習」、「タイムトライアル」の7つに分類できた。その中には、教師の解釈によって、持久走と長距離走の学習内容を混同しているとみられる事例も存在した。

4. まとめ

現場の教師たちは、授業で用いる方法が、持久走・長距離走のそれぞれの目的に対して合目的であるかどうかを検討する必要がある。また、持久走と長距離走の学習内容の違いやそれぞれの指導法を正しく捉え直す必要がある。

<研究Ⅱ>長距離走の実践的研究

5. 研究方法

5-1. 長距離走の授業

対象授業は以下の通りである。(表1)

表1 「対象授業」

学校名	学年	人数	実施期間
碧南市A中学校	1年生 2年生	125人 23人	平成23年10月～平成23年11月
岡崎市B中学校	1年生	160人	平成24年1月～平成24年3月
みよし市C中学校	1年生	122人	平成24年1月～平成24年2月

授業実践は、筆者の考案した全7時間完了の単元計画で行った。(表2)

表2 「単元計画」

時間	1	2	3	4	5	6	7
学習内容	Funrunning 100mすれ ちがい競歩	800m バシユ ート走		800mマ ッチレー ス走		人数 ×800m リレー	チーム 対抗ミ ニ駅伝

5-2. アンケートとその分析方法

上記授業の実践前と後とで持久走・長距離走のイメージに関する自由記述のアンケート調査を行い、その記述内容を分析対象とする。回収されたアンケート数は、単元前は、A中学校が23人(2年生)、B中学校が152人(1年生)、C中学校が107人(1年生)であり、単元後は、A中学校125

人(1年生)・23人(2年生)、B中学校130人(1年生)、C中学校117人(1年生)である。これらのアンケートの記述内容を次の2つの観点から分析する。

1つ目は、アンケートの記述内容を、「グラウンデッド・セオリー・アプローチ」⁵⁾の比較的抽象度の高い概念(カテゴリ)を抽出するまでの手順を援用することにより、長距離走のイメージの概念を抽出する。2つ目に、上記手順で抽出されたカテゴリを単元前後で比較し、今回の授業を通してどのようなイメージの変容があったのかを検討する。

6. 結果と考察

6-1. イメージ抽出

単元前アンケートでは、「記録の停滞」、「順位の変化」、「記録に対する感情」、「順位に対する感情」、「勝負に対する感情」、「種目特性に対する感情」、「充実感」、「教材の退屈さ実感」、「生理的嫌悪感」、「その他の嫌悪感」、「負の予感」、「克己心」、「種目の特性」、「手段としての見方」、「自信の獲得」、「戦術的な学び(対人的意識不明)」、「生理的機能」の17個のイメージを抽出できた。単元後アンケートでは、「記録の変化」、「順位の変化」、「記録に対する感情」、「順位に対する感情」、「勝敗に対する感情」、「応援に対する感情」、「目標に対する感情」、「充実感」、「嫌悪感」、「緊張感の実感」、「嫌悪感の軽減」、「必要感」、「克己心」、「今後の抱負」、「自信の獲得」、「目標設定」、「連帯意識の芽生え」、「戦術的な学び」、「戦術的な学び(対人的意識不明)」、「生理的機能」の20個のイメージを抽出できた。

6-2. 単元前後のイメージ変化

単元後アンケートでは、全体の80%の生徒が長距離走に対して「+」イメージを形成した。その一方、全体の3%の生徒は単元前から「-」イメージのまま変化がみられなかった。これは、授業の中での成功体験の不足が課題として考えられる。

7. まとめ

概念抽出に関しては、単元前は17個（＋－を含む）、単元後は20個（＋－を含む）のイメージを抽出できた。単元前後アンケートのイメージ比較に関しては、単元後には全体の80%の生徒が長距離走に対して「＋」イメージを形成した。このことから、今回実施した長距離走の授業は成果のある授業となったと言えるのではないだろうか。その一方で、単元後に「－」イメージのみを形成した生徒も存在したという課題も残った。

8. 本研究のまとめ

研究Ⅰでは、持久走・長距離走の授業の「方法」や、その学習内容の混同を明らかにすることができた。また、研究Ⅱでは、生徒が楽しさを感じたり、意欲的に取り組めたりする長距離走の授業のやり方や工夫を示すことができた。その授業のやり方とは、まず子どもたちが他者と交わって活動する、「関係」ありきの授業を行うというものである。今回の授業実践では、その「関係」として「競争」を学習の中核とし、以下の3つの工夫をした。

- ①タイムを競う測定的な競争ではなく、人と人が1対1の個人で競り合う実体的な競争
- ②ハンディキャップレース（時差スタート）での競争
- ③個人戦をグループ化したチーム対抗（ミニ駅伝形式など）での競争

この学習を通して、子どもたちに「勝ちたい」、 「自己記録を更新したい」などという思いが芽生えた時に初めて、ペース配分やフォームといった「技術」の必要性を感じるのではないだろうか。今後の長距離走の授業は、今までの技術論から関係論という考え方ではなく、関係論から技術論という考え方へのパラダイム転換が必要になると考える。

9. 引用・参考文献

- 1) 文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説 体育編
- 2) 文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説 保健体育編
- 3) 文部科学省（2009）高等学校学習指導要領解説 保健体育編
- 4) 松村真宏・三浦麻子（2009）人文・社会科学のためのテキストマイニング、誠信書房
- 5) 戈木クレイグヒル滋子（2005）質的研究方法ゼミナール グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ、医学書院

（指導教員 森 勇示）